

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】金 炯辰

【所属】(助成決定時) 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程

【研究題目】19世紀前半(1820～1850年頃)における天皇・朝廷権威の復興と朝幕関係—政治史と思想史の総合的把握を目指して

【研究の目的】(400字程度)

明治維新は、政治の面でいえば、武家政権を終息させ、天皇を中心とする政治体制を回復することへの願望が大きな原動力となった。

長らく統治権力を失っていた天皇・朝廷の権威は、近世後期—1780年代頃から復興の兆しがみえると言われている。これは、ペリー来航(1853)と尊王攘夷運動・倒幕・王政復古へと続く激動の歴史的前提として重要な検討課題である。但し、既存の研究では、朝廷権威の復興に向けた光格天皇(在位:1779～1817、上皇:1817～1840)個人の意志が過度に強調され、朝廷内の他の諸主体の思考と行動については不明な点が多く、また朝廷権威の復興が目指されたことに対し、時の江戸幕府が示した反応についても考察が深められる必要があった。本研究は、以上のことを踏まえ、1820～1850年頃を対象に、朝廷内部に存在した権威復興への志向性と朝幕関係(朝廷と幕府の関係)の諸動向を詳しく検討し、幕末維新期の歴史を念頭に入れた上に、その意味を考察したものである。

【研究の内容・方法】(800字程度)

第1点目に、1823年から1856年まで関白を勤めた鷹司政通の思考と動向を詳細に解明した。

1820年代の朝廷では、古代律令制で朝廷の官人に支給した位田・職田などの名目で、公家らに対する経済的支援を拡充する構想が推進されていた。この構想は江戸幕府の拒否で実現されないが、鷹司政通は、本構想の実現のため、古代律令制の先例調査と対幕府交渉で頑張っていた。本研究では、宮内庁書陵部に伝来する鷹司政通の先例調査・考証書の分析を通じ、朝廷権威(この場合は、公家らに対する朝廷〔天皇〕の権威)の復興策に、鷹司政通が果たした役割を解明することができた。

第2点目に、朝廷と朝廷外部との思想の影響関係をみるため、天理大学附属天理図書館所蔵・古義堂文庫史料を材料に、伊藤仁斎を継承する古義堂の動向を分析した。古義堂の第5代目・伊藤東峯は、関白鷹司政通の重要な学問的アドバイザーであった。例えば、平安後期以来900年ほど途絶えていた天皇号・漢風諡号が1841年の「光格天皇」号の追贈により復活したことは朝廷権威の復興を目指す事例として先行研究が指摘するが、この天皇号・漢風諡号の再興でも、政通に対する東峯の意見具申が重要であった。近世後期の朝廷と古義堂との関係は戦後の研究で全く注目されなかったといっても過言ではなく、本研究の成果は近世朝廷研究・思想史研究の両方にとって重要な寄与と評価したい。

第3点目に、本研究は、朝廷に対する幕府・武家社会の意識変化について考察を深めた。先行研究で、1820年代には朝廷権威に対する将軍家の依存度が高まったと指摘されるが、本研究では国立国会図書館に伝来する幕府役人(表坊主)竹尾次春の備忘録「松栄色」所収の風聞情報を材料に、当時の情勢が幕府関係者の間でどのように評価されたかを把握できた。そして、同時期の久留米藩士であり、公家高倉家の門弟でもあった故実家松岡辰方・松岡行義の言説に着目し、武家社会の天皇・朝廷観の変化を考察した。

【結論・考察】(400字程度)

第1点目に、本研究の遂行により、近世後期の関白鷹司政通は、時の光格上皇と協力して様々な朝廷権威の復興策を推進したことが明らかになった。従来の研究で政通は、朝廷内の代表的な親幕府派の老臣として開国を擁護し、孝明天皇らと対立した幕末史の動向で知られていたが、本研究でみた政通の動向が幕末史のそれとはどのように繋がるのか。これは、次の二点目とも関連する問題である。

第2点目に、本研究では、鷹司政通の朝廷運営に、学問的ブレインであった古義堂伊藤家の関係が与えた影響を明らかにした。これは他の朝廷関係者が殆ど介在しない、政通独自の動きであった。関白と朝廷外部の人間との私的な関係性に朝廷運営が左右される状況を、他の朝廷関係者はどのように考えたのか。政通に対する孝明天皇らの反感が噴出した幕末史の背景がここにあるとみることもできる。

第3点目に、本研究は、19世紀前半における朝廷と幕府の密着が、むしろ幕府関係者・武家社会の間で朝廷に対する批判と警戒心を呼び起こす側面があったことを新たに論じた。